しんぶん
陽だまり

反貧困　くらしと雇用を守る
上小ネットワーク
連絡先　上田市小牧一一六二一四
こぶし会館内
生活と健康を守る会
電話０２６８（２２）９７３０
第００５号

life support house in 信州上田　09年12月30日～10年1月3日

支え合う地域社会に向けて

こぬかを食べて二年余

炊き出しの時間になるといつの間にか現れ、話しかけても何の反応もない。ひたすら食べて、またいつの間にかいなくなる。気になって仕方のない存在だった。久保木代表も何とか話す機会をうかがうが思うようにはいかない様子。

苦肉の策でS君に頼む。彼自身が生活保護を受けながら求職中である。

これが功を奏した。

話し始めれば「垣根」はとれる。腹一杯食べた後で健康チェック。医療生協の看護師さんが優しく丁寧に語りかけ、心をほぐしながら食べ物の状態や健康状態をチェックしていく。それとなく見ていたが「さすがプロ」だ。

びっくりしたのは食べ物のこと。ホームレスになり千曲川の河川敷にテントを張って生活し二年余りになるという。その間の主食は精米所からこぬかを拾ってきて、僅かばかりの小麦粉を混ぜて練り、薄いパン状態にして焼いて食べていたという。銀杏の実が熟すころには銀杏を、クルミが熟すころにはクルミを練り込んでいたという。

近年ではこぬかを健康のために食べる人もいるというが、それはあくまで極少量だし、精米した直後の真新しいものに限られる。

ホームレスの人の間では結構何がしかの収入を得てそれなりの物を食べている場合が多いが、この人の場合はかなり特殊のように思える。

何故そうなのか。ホームレスになった事情について未だ詳しく語らない中では確たることは言えないが、たった一言「棄てられた」と語った時、彼の顔が少し歪んだように見えた。

支援は難しい！

マイナス6℃までは耐えられると豪語していた彼も、血圧220には参ったらしい。病院に行き診療を受けた後「生活支援の家」に入居することになった。

しかし、数年にもわたって孤独な暮らしを過ごし、あらゆることを酒で紛らわせてきた彼にとって、たとえ3人程度であっても集団生活は苦しく、まだまだ不安の残っている中では酒で紛らわせて眠ることが必要だったのかも知れない。

突然「テレビを見せろ！　正月くらい酒を飲ませろ！」と大声で要求し始めた。断固として拒否すると、帰るという。血圧のことを考えると、一段と冷え込みそうなことが心配ではあったが引き留めることはせず、夜間の見回りで注意することとした。

午前零時、冷え込んでいる中でパトロールスタッフが「明日は来るように」と声をかける。

温かい一夜とテントでの暮らしとの狭間で随分と葛藤があったのかも知れないが、翌日は姿を見せた。これで何とかなる、そんな思いが一気に膨らんだ。

俺より苦しい人がいる

3月から行われてきた陽だまりネット相談会で問題解決した青年が、全日程泊まり込みで支援活動に従事した。

2年ほど前に父親も失い、今は天涯孤独の身。仕事を見つけ、早く父親の遺骨を故郷の北海道に埋骨したいという。

最初は暇つぶし程度に考えていた向きもあるが、ホームレスの人たちの実情を目の当たりにして「俺よりもっと大変な人がいる」ことが分かり、そこからほとんど眠ることもできない支援活動に従事した。

連日街中をパトロールし、困窮者に語りかけ説得して「生活支援の家」にとにもかくにも連れてくる。我々が話しかけても何の反応も示さない人々が、彼の説得には応じるのだ。今回の最大の功労者かも知れない。

何よりも、ホームレスの人たちのことを純粋に心の底から心配し、ご飯一杯食べてもらっただけで隠しきれない喜びを報告に来る。

入居者の皆さんが上田市の援助でそれぞれに生活再建に向けて出発する朝、駐車場の角で泣いていた彼を見た。我々のような俗物と違って、ただ一心に「助けたい」との思いで奮闘した彼にしか流れることのない涙だったと思う。

それから5分もたたない内に「涙出ちゃった」と報告をしに来た。

青年、寒風をついてパトロールへ

二十歳代前半の青年が頑張った。自身が相談に訪れたのだが、それより何より、その場の雰囲気が彼を虜にしたらしい。

一旦帰宅した後、泊まり込みの体制で参加してきた。

思い切ってスタッフと共に深夜のパトロールに参加してもらった。この夜は一段と冷え込んだ。

市内の駐車場や河川敷をパトロールし1時間ほどで戻ったが、休む間もなく今度は上田公園内のパトロールに行く。

駐車場では明らかに車中生活者の車を発見。ナンバーを控えてきた。

パトロールの様子を報告し、語り合う彼の横顔は明らかにその前と違っていた。もちろん、これで

貧困ビジネス

深刻な問題として「貧困ビジネス」について考えておきたい。地方の小さな町での小規模な取り組みにもかかわらず、触手は伸びてくるのである。

私自身も最近までホームレスだったが、仕事を得て人間が変わった。あなたも変われるし、変わろうとする根性が大事だ。

日当八千円。半分は親方に預け、貯金する。

寮費や食費は私の所に泊れば掛からない。

失業に苦しみ続けている者にとってはいきなり光が射したかの様な印象を与えるのだ。何のことはない。

泊まるところが「私の所」ではなく、貯金とは逃げ出さないための担保なのだ。ちょっとした事故でもあれば「罰則金」で取られてしまう。

違法、無法、暴力だけが支配するような社会に落とし込まれるだけなのだ。

小さな施設をもっているらしい。生活保護受給者に住まいを提供し、ちょっとした仕事も提供できるようにしたい、ということで来た人もいた。

家賃が三万五千円で食費が三万円だとか説明する。

如何にも真面目そうな顔をして何とバカなことを考えるのだろう。残りの三万円程度でどうやって仕事探しができるというのだろう。しかも山の中から。

貧困ビジネスで儲ける悪徳業者として名前を売るか、大きな犠牲を払って困窮者を救うか、どちらかを選択する以外にないと話して帰ってもらった。

良心の重みズッシリ

今回の計画が決まったのは十一月のことだった。世の常とは言え、計画が決まるまでが長い。終わってしまえばどうでも良い様なことに議論はしばしば集中する。

計画を発表するにも最終案が決まらなければ小出しに発表する以外に道はない。

発案から決定までの半分はそうこうして終わる。

市民の皆さんに対する支援要請も遅れに遅れた。

食料、衣類、寝具、スタッフ、お金などなどの協力を訴え、贅沢は言わないが年末年始に相応しく、お風呂に入り、年越しそばを食べ、お雑煮を食べ、暖かな部屋で穏やかに過ごせることを願って準備を開始した。

支援の輪は予想をはるかに超えて広がっていった。それは、活動期間が終わった後も続いた。

お年寄りが手に持てるだけのお米をレジ袋に入れて持ってきてくれた。ブスッとした顔で黙って一万円札を突き出していったお爺さんもいた。

少しお米があるから取りに来て欲しいと言われ、行ってみたら五俵も軽自動車に積みこむことになってしまったことも。

キャベツ十個入り段ボール30箱、リンゴは100㌔、200㌔の単位で。ある保険会社からは非常食の入れ替えを早めに実施することで乾パンと水を大量にいただいた。

お寺や教会からお金が振り込まれ、そのうち6名の方が宿泊をされました。また、炊き出しの食事に来た方や支援物資の受け取りに来られた方は、のべ158名にのぼりました。

相談者や宿泊者の実態は昨今の経済情勢を反映していずれも深刻なもので、「会社を解雇され、けさ会社の寮を出されて行き場がなくなった」、「仕事を失いスーパーの駐車場で年越しをした。所持金が数百円になったので泊めてほしい」「一日一食しか食べていないので食事をさせてほしい」などの声が次々に寄せられました。

他方で、困窮者に対する支援の輪が急速に広がったことも今回の取り組みの大きな特徴でした。ボランティアスタッフの参加は当初の予想を大きく超え、5日間でのべ245名にのぼりました。また支援物資は、乾そば、麺類、モチ、乾パン、飲料、食器、果物、調味料、タオル、ジャガイモ、米、衣類、野菜などが12月初めから1月3日まで途切れることなく寄せられました。多くのカンパも寄せられました。

上田をはじめ地域の多くの皆様が、困っている人々を見捨てることなく支えあう、あたたかい気持ちを持っていることを強く実感した5日間でした。

皆様のご協力のおかげで、多くの人々に食事と支援物資を届け、宿泊場所を提供し、生活再建に向けた第一歩を踏み出してもらうことが可能になりました。あらためて心から御礼申し上げます。

私たちはこれからも、生活に困窮する人々を支え、自立を支援する活動を続けていきます。今後とも、ぜひあたたかいご支援とご協力をお願いいたします。

末筆ながら、皆様の今年一年のご健康とご多幸をお祈りいたします。

２０１０年１月５日

「年末年始生活支援の家in信州上田」
代表　滝澤修一　弁護士
久保木匡介　長野大学准教授
実行委員会一同

支援物資・カンパ ご協力の御礼

初春の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

このたびは、09年12月30日より10年1月3日まで行われた、私たちの取り組み「年末年始生活支援の家in信州上田」にあたたかいご協力をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで5日間の活動を無事に終えることができましたので、ここにご報告させていただくと共に感謝の気持ちを述べさせていただきます。

5日間の取り組みでは、のべ63名の方が相談に訪れ、そのうち6名の方が宿泊をされました。多くのカンパも寄せられました。また、

世界でも稀な憲法25条は生きているか

八一円という生活できない最低賃金制度、労賃が削られ続け、公共事業が貧乏人を作り出してしまう、福祉の世界では生活できない賃金がまかり通っている。忙しい中でも色々なことが頭をよぎる。その意味でも過酷な五日間だった。

すべてが解決するわけでもなく、彼の明日からの暮らしに大きな変化はないかも知れないが、何かが変わり始めるきっかけを彼はつかんだのではないだろうか。

もしそうであれば、というより、そうであって欲しいと願う。

行政と市民の共同

れたりトラックで生活用品などが届けられた。

心配した布団も大量に集まり、何よりも不安だった「最初の風呂」もある銭湯の申し出で解決した。

こうして総重量7トン近くの物資が寄せられ、50万円近い資金が寄せられた。

私たちは、こうした山のような支援物資を前にして、「こんなことになった社会を変えて欲しい」との市民の思いを強く感じた。

深刻な不況の中でセーフティーネットがボロボロなことがはっきりとした。「そんなことでいいのか、市民で出来ることがあれば力を出そうじゃないか」、そんな声が聞こえてくるような物資の山だった。

多くのマスコミも取材に入った。一斉に報道された以降は更に市民の協力の輪が広がった。

宿泊者6名の内生活保護の必要性があった4名が受給に至った。その限りにおいて目的は達成されたと言える。しかし、当初の情報で言われていた概ね12～13名のホームレス全体に手が届いたわけではない。

この活動の中で新たな情報も寄せられた。予想外に数は多いのである。無論、全ての人に手が届くとは到底考えられないが、必要とする人々に私たちの思いが届いたかどうかという不安は強く残る。

しかし、今回の試みは直接的な救済だけではなしに、多くの市民の皆さんに実態を知らせ、貧困について大いに考えていただく機会をつくることにもあった。この視点からすると、想定以上の成功を収めることができたと断言できる。そして、たとえ一人であっても、市民の運動が行政の協力も得て暮らしの再建に道を開くことができたことに意義がある。「行政にお任せ」から市民自身が力を寄せ合って問題解決に一歩踏み出したその意義は大きい。

今回の「年末年始生活支援の家」の取り組みが、知恵を絞りだすためのいくばくかの刺激になったのであればこれ以上の幸せはない。

上田市の協力は県内でも稀にみる力強さを持って具体化が進んだ。

会場について私たちは勤労者福祉センターの利用を申し入れていたが、上田市は独自に検討を加えた結果、勤労青少年ホームの利用を提案してきた。その結果が大正解であったことは言うまでもない。申し入れを単に受け入れるだけではなしに、独自に検討して異なる提案をしていただいたことは、上田市と市民運動である私たちの信頼関係を一気に増幅させたと思う。

三月に相談会を開催して以来、四回にわたって行政との懇談会を行い、率直な議論をし、行政の皆さんも相談会場を訪れて実際の姿をつぶさに見ていられた。

今回の取り組みでも連日会場を訪れ、貧困の現場を体験された。

一年近くの積み重ねが行政と市民運動の共同を前進させてきたと言える。

運動そのものは生活困窮者に対する年末年始という限られた期間の取り組みで、長い目で見れば始まったばかりのものではあるが、市民と行政の共同についてまた一つ経験を積み、新しい可能性を成長させたと思う。

期間中はもちろん、準備段階で当該自治会などへのご挨拶にも幹部の皆さん自ら同行していただくなど、恐縮極まる対応をして下さった。

市長も元日には見えられ、実行委員会代表の滝沢修一弁護士とは同期生ということもあり、親しく懇談していただいた。

いま日本の社会では、誰もが突然貧困に陥ってしまう可能性を背負ってしまった。

それだけに地域社会が結束して防波堤を築き、命綱を準備しなければならない。

美味いものをたらふく食べ、使い切れないお金を儲けることが「豊かさ」ではない。

こたつに家族が集い、みかんの皮をむき、除夜の鐘を聞きながら年越しそばを食べ、善男善女は神社仏閣にお参りし、お雑煮を食べ、僅かばかりのお酒に笑い声が巻き起こる、そんな暮らしを誰もが送れることこそ「真の豊かさ」ではないのかと思う。

それを実現する仕事は、行政にお任せでも、一人ひとりの市民の自己責任だと言っても実現できるものではない。

行政には行政の壁があり、市民運動には市民運動の壁がある。相互に乗り越えていく努力を積み重ね、知恵を尽くしていく以外に道はない。

「失業と貧困に立ち向かう市民集会in 信州上田」アピール（要旨）

2009. 11. 21

私たちは労働者のリストラを進めてきた上田地域の企業に訴えます

これ以上の「派遣切り」「雇い止め」をやめてください。そして非正規労働者に対しても雇用のルールを守り、雇用保険や社会保険などのセーフティネットをきちんと保障してください。不況を理由にさえすればいくら労働者を切り捨てても許されると考えるのは間違いです。いま、地域で職を失い生活に行き詰まっている人々はみな、これまであなたたちの会社の経営を支え、地域経済を支えてきた人々です。

私たちは日本国政府、特に貧困の解決を公約した鳩山政権に訴えます

・企業による労働者の使い捨てがこれ以上起きないように、労働者派遣法の抜本改正を行い、登録型派遣を禁止してください。雇用のルールを守らない企業に対しては、実効性のある指導を行ってください。

・すべての労働者が加入できる雇用保険制度を整備してください。

・雇用保険への加入の有無にかかわらず、すべての失業者が受けられる職業訓練とその間の所得保障の制度を整備してください。

・生活保護の運用において課されている様々な要件を緩和し、多くの困窮者が受給できる制度にしてください。地方における困窮者の実情に合わせ、自動車の保有を認めるなど柔軟な運用を行うこと、外国籍住民に対しても日本人と同じように制度運用を行うこと、受給期間を限定するような無理な自立計画を立てさせないことなどを実行してください。

・失業して当面の収入がなくなっても住居を失わないように、公営住宅の整備を国の責任で進めてください。

私たちは上田市、長野県をはじめとする地方自治体に訴えます

・住民の命と健康を守るとりでとして、困窮する住民の代弁者として、上記の内容を国に働きかけてください。国の制度運用を住民の立場から積極的に改善する役割を果たしてください。

・生活困窮者に対する相談体制を抜本的に強化してください。すでに福祉の窓口では一人の職員が抱える相談数は限界を超えています。

・自治体内で貧困による生存の危機に陥っている人々がどれくらいいるのか、実態を把握する調査を行ってください。現在でも、生活の困窮を誰にも相談できないまま地域に滞留している人々が相当数いると考えられます。

・住居を失った人々が一時的に滞在しながら相談できるシェルターを自治体の責任で整備してください。

私たちは、上田地域に住む人々に訴えます

私たちとともに、失業し貧困に陥っている人々やその家族を支援する活動に加わってください。今、私たちの身近で多くの人々が失業と貧困を原因とする生活の不安、健康への不安、子どもの将来への不安、住まいを失う不安に苦しみながら孤立しています。私たちは、私たちの住む上田地域がこのような人々を置き去りにしない、あたたかい社会であってほしいと願っています。私たちが率先して困窮したときには支えあい助け合える社会を作っていこうではありませんか。

最後に私たちは、この地域で職を失い貧困に苦しむ人々に訴えます

まじめに働いてきた者が突然仕事を奪われ、生活に困窮したとしても、それはその人の責任ではありません。日本国憲法の第25条はすべての人々に「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を保障しています。これを保障するのは政治の責任であり、社会の責任です。私たちは皆さんが貧困から抜け出すためにできる限りの支援をします。貧困を自分の責任として抱え込むのではなく、支えあい・助け合いの中に希望を持ちながら、生きていく道を共に切り開いていきましょう。そして、職を失っても再び自立して生活していける社会を一緒に作っていきましょう。

（このアピールを実現するため、今後も市民の皆さんと共に様々な活動を進めてまいります。）

5日間の取組結果を示す数値

		相談件数	食事（スタッフ別）			泊まり		スタッフ数	募金		物資
			朝	昼	夜	男	女		人数	金額	人数
30日	水	12		10	3	1	1	60	3	30,515	6
31日	木	17	3	35	5	3	1	53	3	51,318	11
1日	金	12	15	25	6	3	1	36	1	32,275	7
2日	土	18	5	20	8	4	2	41	2	8,505	7
3日	日	4	10	13				55			2
合計		63	33	103	22	11	5	245	9	122,613	33
			累計		158	16					

参加した人々の声

参加したスタッフは二百名を超え、誰よりも頼りになる大きな集団となった。市民運動としてこれだけの人々が、年末年始という特別な時に参集した例は寡聞にして知らない。

これらの人々の声を聞かずして取り組みの内容を報告したことにはならないし、これからの展望を語ることも出来ない。

■　初めての試みでどうなるかと思いましたが、このイベントが参加者、物資提供者など大きな市民の協力の中で成功できたことを市民の誇りにしたいと思います。

憲法二十五条を生きるということの意味を改めて感じました。この様にして、憲法を一条ずつ実現していくものだということを確認しました。

多くの参加者が勇気と希望を手にしたと思います。中心で頑張ってくれた責任者の皆さんの献身的努力に感謝。またやりましょう。

■　一年間の相談会の経験が、この「支援の家」につながったと思います。スタッフの皆さんの積極的な働きに刺激されて、よく自分自身も動くことができました。今回の活動は、「貧困」をなくそうという地域活動が、「普段着」で出来ることにつながっていくと思いました。

■　ボランティアをやってみて、職場で役に立ちます。

■　大成功だったと思います。それも、三月からの相談活動の延長線だったことだからだと思います。

それに、マスコミ報道もよかったと思います。

■　この取り組みは、やって良かったと思いました。参加されたスタッフの皆さんが、この取り組みの役割を理解していて、心一つに頑張っていてすがだと思いました。労働組合からの参加をもっと増やさなければならない、そうでないと、しっかりしたまともな労働組合運動ができない・・・・・責任を感じています。

■　「ここに来るとホッとする、ありがたいと思う」。そんな言葉が訪れる人から聞かれました。一人ひとりの力がみんなを支えている、その力はとても大きい、人を救うのはやはり「人」だと感じました。相談者の人が、ここに来て少しでも自分の未来に希望を見出してもらえれば・・と思います。

■　たいしてお役に立てませんでしたが、年末年始をこういう場で過ごせたことがとても良かったと思っています。おいしいものをごちそうになりに来ただけみたいですみませんでした。にぎやかし要員と思ってください。娘にはとても良い経験になったと思います。

■　感想という感想を持てる程手伝えていませんが、家がない、金がないという現在を生きている方が多いことを改めて実感しました。年を越せないという方々の苦労は想像することしかできませんが、少しでも、一人でも多く、この寒空で凍える人が温かい場所で過ごせるよう、今後もこの様な相談会などに参加していきたいです。（高校一年）

■　ご夫婦二人が宿泊しました。夜、ぐっすり安心して眠っていらっしゃったのが印象的でした。人数は少なかったのですが、これで落ち着いた暮らしに戻れる方がいて良かったと思います。人の再生のお手伝いできるのは良い経験になります。

■　若い人たちが多数参加しているのが素晴らしく思いました。正月早々の一番の勉強でした。市当局が動いてくれたのが心強く思います。

■　ボランティアをやらせてもらいました。夜回りの方は中々見つからなかったです。でも、一人でも声をかけてあげられればいいなと思っていました。ボランティアをやって本当に良かったです。ありがとうございました。

■　上小地域における今回の相談会は、現情勢下における極めて重要で、社会的に注目をひく行動であったと痛感する。相談者、スタッフ、宿泊者の数は、上小地域における助け合いの心の広がりがいかに草の根に広がっているかを表しているとも言える。この計画をした実行委員会の努力と尽力に心から敬意を表します。

編集後記

どん底に突き落とされた人々の強さ、弱さ、時には醜さも体験した。

今回の取り組みでは、そんな人たちの触れられたくないところまで踏み込まざるを得ないこともあった。

人が人として生きることがこれほど難しい時代があっただろうか。戦争なら戦争でわかる気もするが、平和で民主主義のこの時代だ。

このまま放置すれば、闇の社会がつくられる不安も感じた。そんなことは誰もが望んではいないと信じ、新たな出発を期したい。

鳥毛